

「夜の寢覚」末尾欠巻部復元「ちご宮」について二説

米 田 明 美

はじめに

定家筆「更級日記」奥書により菅原孝標女の作と伝える「夜の寢覚」は、現存伝本すべてに中間と末尾に欠巻があり、その内容について先学諸氏により復元が試みられてきた。⁽³⁾「無名草子」⁽⁴⁾「風葉和歌集」⁽⁵⁾「拾遺百番歌合」⁽⁶⁾「改作本寢覚物語」⁽⁷⁾「寢覚物語絵巻詞書」を主とし、その散逸部の概要が組み立てられ、ほぼ論が尽くされたように思われたが、最近その中間末尾欠巻部に関する新出資料「伝慈円筆寢覚物語切」⁽⁴⁾「寢覚物語抜書」⁽⁵⁾が次々と発見紹介されるに至り、新たな内容を構築し直さざる得なくなったと言えよう。⁽⁶⁾特に末尾欠巻部の資料の出現は、この物語の構想を考える上で重要であるだけに、非常に興味深いと思われる。

今回は、その末尾欠巻部に関し、近年新たに見出された資料「伝慈円筆寢覚物語切」を再検討してみたい。この資料で初めてその名が記される「ちご宮」については、この資料の紹介者である田中登氏は、督の君の生んだ皇子ではないかと論究され、その後『寢覚物語欠巻部資料集成』⁽⁸⁾では「ちご宮」は石山姫と今上（冷泉院の皇子）との間に生まれた子か、不詳」と注を付けられた。この「ちご宮」は誰を指すのか、まだ結論は出ていない。改めて「ちご宮」に関して詳細に年譜を整理し「伝慈円筆寢覚物語切」の内容を検討すると、末尾欠巻部で新たに登場する皇子の可能性があると思われる。もし新たな皇子の登場となれば、今後末尾の構想を再検討する必要も出てこよう。今回「ちご宮」に該当する人物二説を提示し、慎重に検証して行きたい。

次の順序に従い、論の展開を行う。

- 一、「伝慈円筆寢覚物語切」について
- 二、末尾欠巻部の内容と「伝慈円筆寢覚物語切」の場面
- 三、「伝慈円筆寢覚物語切」でのまさこの年齢
- 四、「ちご宮」と称される可能性の皇子
- 五、第一の予言との関連

一、「伝慈円筆寢覚物語切」について

「伝慈円筆寢覚物語切」は、田中登氏が平成四年の関西平安文学会例会（現在中古文学会関西支部会）で発表され、後『中古文学』第五〇号に掲載され、加えてそのツレの古筆切について『汲古』第二十九号に紹介された。それらの御論は、平成九年に御著書『古筆切の国文学的研究』に収められ、翻刻は、平成十四年に出版された「夜の寢覚」の散逸資料だけをまとめた『寢覚物語欠巻部資料集成』にすべて収載されている。

この「伝慈円筆寢覚物語切」は現在三葉見つかっており、いずれも末尾欠巻部に属するものばかりである。しかも「夜の寢覚」の改作本や絵巻詞書ではなく、現存本の本文そのものの断簡と思われる。この「伝慈円筆寢覚物語切」は、慈円筆と伝えられているが慈円の真筆ではなく、鎌倉時代初期から中期頃の書写であろうと田中登氏は述べておられる。今回問題とするのはその中の一葉で、『古筆学大成25』⁽¹⁰⁾に未詳物語の一部として扱われていた一葉であるが、田中氏により「伝慈円筆寢覚

物語切」のツレであることが判明した断簡である。

○「伝慈円筆寢覚物語切」

おもひきこえてしを、中納言のたちつゞきたるなまめかしさ、なつかしき、こまやかなるにはひなど、や、たちまさりてみゆるを、さま／＼とをくなるまでうちみやられて、人やりならずかなしきにも、「なぞや、わろのこ、ろや。いまはかく思べきことか」とせめておぼしをちて、さい宮の御をこなひに御返にいらせ給て、つねよりもこなひあかし給に、君たちのおもかげは、なを身をはなれず。

我ながらゆめかうつ、かとだにこそさめてもさめぬよにまどひけれ

御をこなひのひまには、ちご宮のかぎりなくをよすげまさりたまふを、こひしく、おぼつかなくおもひきこえ給。御かたみには、かぎりなう思ひかしづき、こへ：

末尾欠巻部であり誤写もあるのだろうか、この部分だけでは文意がはっきりしない箇所もある。この内容を私なりに整理してみると、この文章の主語は、「つねよりもこなひあかし給」人物つまり仏道修行する女性であろう。その女性が、誰かの後に続いて立ち去っていく中納言なる人の後ろ姿を見やりながら、独り思い悩んでいると考えられる。その中納言の姿は、「なまめかしさ、なつかしき、こまやかなるにほひなど、や、たちまさりて」見え、その姿が小さくなるまで見守り続けている。独り悲しく思うものの「なぞや、わろのこ、ろや。いまはかく思べきことか」と強いて思い直し、「さい宮」との勤行を努め(誤写あるか、意味不明)、いつもより熱心に行おうとする。しかし面影はやはり身から離れず、「我ながら…」と歌を詠じる。そして修行の際には、「ちご宮のかぎりなくをよすげまさりたまふ」を恋しく思い出してしまふ、そういう情景であろうか。末尾の「御かたみには…」はこれだけでは文意は解せない。後述するが、「ちご宮」とは別の人物を指している可能性が考えられる。

以上の記述から最初の報告者田中氏の御論の通り、この「伝慈円筆寢覚物語切」の女性はおもひや出家していると解することが出来、女主人公寢覚の上その人である。現在の「夜の寢覚」物語研究では、寢覚の上が最終的に出家したことは、絵巻

「詞書の記述や「拾遺百番歌合」(十六番右・二十番右)の詞書により認められているが、いづどこで出家し修行していたかについては不明であった。この「伝慈円筆寢覚物語切」では、熱心に勤行していることから、寢覚の上の出家生活が初めて確認できたのである。

次にこの「中納言」なる人物であるが、寢覚の上が修行中も脳裏から離れない人物であり、これも田中氏が述べられる「まさこ」と考えるのが適当であろう。「拾遺百番歌合」に、寢覚の上が、北山に籠もっているまさこを思いやる歌が採られている。

右大将、三ゐの中將ときこえし、「きたやまにこもりぬ」と、つたへき、て (寢覚上)

しらざりしやまべの月をひとり見て世になき身とやおもひいづらむへ八番右ゝまた同歌は、新出資料「夜寢覚拔書」にも引かれており、

あはれ我を思いつる人もあらむかし。三位中將ふかくあとをたちたえこもりたるらむ心□しのほどよ。いかでゆめ□うちにも、□くてあるぞとしらせてしかな。おさなき人のさま／＼恋しさなど、身をせむるように、いとたへがた□にも、ものおもふ秋はあまたへにしかど、いとかくしもは、おぼえざりきかし。

しほれわびわがふるさとのおぎの葉にみだるとつげよあきのゆふかせ

しらざりし山ぢの月をひとりみて世になき身とやおもひいづらむ

とある。前述の「伝慈円筆寢覚物語切」の場面は、この「拾遺百番歌合」「夜寢覚拔書」の詠歌場面の後に位置すると思われる。まさこは、三位中將から中納言を経て、物語での最終官職の右大将に出世したのであろう。

三行目の「さい宮」に関しても、田中氏のご指摘通り、寢覚の上の父入道の妹女二の宮のことであろう。現存本巻四で、男君と結婚した女一の宮の病重く、寢覚の上が生霊として取り憑いているとの噂が広まる。いたたまれなくなった寢覚の上は、父入道の住む広沢に移ると、かつて自分が居た寢殿には、

昔おはせしかたには、入道殿の一つ御腹の女二の宮と申ししは、齋宮にぞ居たまひにしかど、代はりたまひにし後、きこえをかす人あまたあれど、ことの

ほかにおぼし離れて、世を背かしたまひにけるが、京の宮も焼けにければ、同じ山水の流れももろともにきこえかはいたまひて、この三年ばかりは、ここにぞおはしましける。¹⁵⁾

と、父入道の妹女二の宮が齋宮を辞した後出家し住んでいたとある。また巻五でも、寝覚の上が出家を志し広沢に來たものの、男君に説得され京に戻ることになった場面で、男君が警戒したため「齋宮に御消息ばかりにて、御対面もなきを、いと本意なくあやしとおぼしながら、はかなき御事も心にもかなわず」と、齋宮に会えなかったことを嘆いている記述がある。いずれこの叔母齋宮のもとで出家生活を送りたいとの心づもりがあったことを意味してのではないだろうか。寝覚の上の出家は、構想上早い段階から準備されていたと考えられよう。¹⁶⁾結局末尾欠巻部で、この叔母のもとで寝覚の上は出家したのである。以上から、問題とする「伝慈円筆寝覚物語切」の場面で展開される地は、広沢と考えられる。

二、末尾欠巻部の内容と「伝慈円筆寝覚物語切」の場面

ここで、末尾散逸部に入ってからの上出来事を、順に並べてみたい。新編日本古典文学全集の解説等をもとに作成し、一部その後の新資料¹⁷⁾も書き加えた。(以下の文で説明するため、出来事順に番号を付し【】内にその根拠を示した)

(物語十六年)二月一〇日 寝覚の上男児(第三子)を出産。七月一日頃 督の皇子誕生。【現存本 巻五】

(ここより散逸部)

①石山の姫君(十二歳) 裳着。【拾遺百番歌合 二番右】石山の姫君入内、東宮妃となる。

(これ以降何年の出来事か決め手欠く)

②帝讓位、東宮即位、石山の姫君立后、督の君の皇子立坊。寝覚の上喜ぶ。【無名草子】

③寝覚の上の父入道七十賀、中宮(石山の姫君)行啓。【風葉和歌集 一四

〇八】

初秋 ④寝覚の上、世間に死亡と公表。その後なんらかの方法で蘇生したか。

【無名草子、寝覚物語抜書】

⑤寝覚の上、白河の院に籠もる。【拾遺百番歌合 九番右・十五番右、風葉和歌集 一二九】

⑥まさこ君(三位中将)母の死を聞き北山に籠もる。【拾遺百番歌合 八番右・十七番右、風葉和歌集 一二七〇】

⑦寝覚の上まさこを思う。【寝覚物語抜書】

⑧まさこ中宮(石山の姫君)喪に服す。【風葉和歌集 六二一・六八九】

春 ⑨まさこ君は春頃まで北山に籠もっていた。【拾遺百番歌合 十七番右、風葉和歌集 六一三】

⑩まさこ勘当事件。【無名草子、風葉和歌集 一二二五】

⑪まさこ女三の宮の女房のもとを訪れる。【無名草子、拾遺百番歌合 十三番右、風葉和歌集 一三〇九・一三一〇、絵巻詞書】

⑫寝覚の上、冷泉帝(山の帝)に手紙を送る。【拾遺百番歌合 二十番右、絵巻詞書】

⑬東宮(督の君の皇子)のもとに宣耀殿女御入内。【風葉和歌集 九二五】

物語現存部分の最後は物語十六年で、石山の姫君は十二歳、まさこは中間欠巻部で誕生したので明確ではないが十歳ぐらいと推定される。そして散逸部に入り、①石山の姫君の年齢からまもなく裳着が行われ、中宮(最終呼称女院)が腰結の役を務める。その後、石山の姫君は東宮のもとに入内したのである。これ以降は何年後のことか分からないが、②「無名草子」の記述の

きさいの宮、春宮など、いちどにたちたまふをり、中うへみざりいで、ねざめせしむかしのこともわすられてけふのまどひにゆくこゝろかな
といはれたるほど、いとにくし。

と讓位があり、督の君の生んだ皇子が東宮に、石山の姫君は中宮になる。引用中の右に言う「いちどにたちたまふことを喜ぶ寝覚の上が、「ねざめせし…」と歌を詠

んだ場面であろう。③寢覚の上の父入道の年齢は、物語の現存部分には記されていないが、現存部分の巻末で寢覚の上は二十八歳、姉大君と五歳離れていたことからすると、入道の七十賀はこのあたりか。

この後④寢覚の上偽死事件が起こったと考えられよう。従来偽死事件とまさこ勸当事件の前後関係が不明であったが、「伝慈円筆寢覚物語切」の別の一葉の発見で、偽死事件の方が先に起こったことが判明した。「無名草子」に大いに非難された偽死事件であるが、寢覚の上は何かの事件に巻き込まれ亡くなり、その後何らかの方法で蘇生したと考えられる。その蘇生直後の場面が、最近発見された「夜寢覚拔書」に記されていたことは記憶に新しい。寢覚の上がどこで一旦死んで蘇生したのか詳細は不明だが、その後⑤白河院に居たらしい。そして寢覚の上は、⑧自分は世間では亡くなったと公表され、⑥まさこが北山に籠もって居ることを知る。

前引の「伝慈円筆寢覚物語切」の場面はこのあたりか。白河院からこっそりと広沢に移り、叔母齋宮の元で出家したと考えられよう。ここでひたすら身を隠し世間の人に知られないようにして仏道修行に励み、落ち着いた日々を送っていたところに、何らかの事情で来たまさこの姿を偶然垣間見、動揺したのであろう。

三、「伝慈円筆寢覚物語切」でのまさこの年齢

ではこの「伝慈円筆寢覚物語切」の場面は、末尾欠巻部に入って何年後の出来事なのか。まさこが中納言職に就いていることを手懸かりにして考えてみたい。前述の「拾遺百番歌合」八番右の詞書は「右大将、三ゐの中将ときこえし、『きたやまにこもりぬぬ』と、つたへき、て」とある。また同歌が採られた「夜寢覚拔書」でも「三位中将ふかくあとをたちたえこもりたるらむ心□しのほどよ」とあり、母の死を聞き北山に籠もった時まさこは三位中将であったことが分かる。ところが、この「伝慈円筆寢覚物語切」では「中納言」と記されこの間に昇進があったことになる。中将と中納言は兼官になりやすく、まさこの父である男君も物語冒頭では「権中納言にて中将かけたまへる」として登場するが、物語では以後中納言と重職の方で呼称される。これは「源氏物語」²⁰以下他の物語でも同様である。そう考えるとま

さこの場合、三位中将と中納言は兼職であった可能性は少なく、時間的ずれがあり、昇進したと考えるべきであろう。物語の終盤近く、寢覚の上偽死事件やまさこ君勸当事件も解決の後、まさこが母寢覚の上の手紙を出家姿の院に見せる場面がある。ここでまさこは中納言と呼ばれること²¹から、この「伝慈円筆寢覚物語切」が散逸部分としては中納言職に就く最も早い段階の記述と言うことになる。

まさこは、物語の中間欠巻部で誕生し、現存部の末尾では「若君」と称され、十歳程度であったと考えられる。そして末尾の散逸部で元服し三位中将になり中納言となったと推定できる。他の物語で、主役級の登場人物が何歳で中納言職に就くか調べると、「源氏物語」では、源氏が中納言に就いた記述はないが、その子夕霧は十八歳で中納言となり、薫は二十三歳で中納言になっている。「堤中納言物語」の一つ「逢坂こえぬ権中納言」では、二十一〜二歳であり、「狭衣物語」の狭衣大将は十七〜八歳で中納言とある。「浜松中納言物語」では、逸亡首巻で既に主人公は中納言になっているため、残念ながら年齢は判断できない。以上の例に加えて、まさこの父である男君は物語冒頭で「年もまだ二十にたらぬほどにて、権中納言にて」と登場すること。また史実では長暦三年(一〇四〇)藤原通房が十五歳で権中納言に就いていること。²¹長暦年間には孝標女の生存中であるが、通房は頼通の長男で、摂関白家の威光もあり特異な例ではある。さらに、まさこは三位中将の時母が亡くなったと知らされ半年は北山に籠もっている²²ので、あるいは昇進を理由に都に戻されたと考えることもできよう。これらの条件を考慮すると、十七〜八歳前後ぐらいが妥当なところと思われる。この後まさこは、女三の宮と恋愛事件を起こすが、その時十八〜二十歳ぐらいで年齢的にふさわしいと思われる。そう考えると、最初に引いた断簡の場面は末尾欠巻部に入り七〜八年ぐらい経過した頃とすれば、不自然ではない。

四、「ちご宮」と称される可能性の皇子

以上のように、この場面が末尾欠巻部に入り七〜八年は経過した頃とすると、「ちご宮」がもし督の君が生んだ皇子だととして、八〜九歳にはなっていることにな

る。そもそも「ちご」という語は、一般的に生まれて間もない子を指す。「夜の寝覚」現存部で七例²²⁾、すべて生まれて直ぐの子や「ちごのように」と頼りなさげの女性（寝覚の上）の形容に使われている。「ちご宮」という語は王朝物語の中では馴染みの薄い語で、この「夜の寝覚」断簡以外では二例しか見出せない。

一例目は「うつほ物語」藤原の君の巻で、あて宮の妹十の君の通称としてその名が見られる。「うつほ物語」の場合、「あて宮」「ちご宮」とも藤原雅頼の娘であって「宮」でなく、あくまで呼び名（通称）である。「夜の寝覚」と「うつほ物語」の類似は既に石川徹氏に指摘されており、その影響を可能性として捨て去ることはできないが、これでは男女の判断はつかない。だが「夜の寝覚」現存部分で皇女については、「女宮」「女一宮」「女二宮」と女を表す語が示されている。「伝慈円筆寝覚物語切」の「ちご宮」は、女宮ではなく皇子ではないだろうか。「夜の寝覚」は「うつほ物語」とは異なり、皇族以外に「〇〇宮」と付く人物は考え難いのではないだろうか。

二例目は「栄花物語」岩陰の巻である。

児宮のいみじうあはてさせたまふほどのうつくしきにも、東宮のいといみじうおよすけさせたまふほどを、人ずてに聞こしめしても、飽かぬさまに思しめさる。²⁴⁾

と、一条天皇の皇子敦良親王（児宮）が、たいそう気ぜわしく動き回っているのがかわいいにつけても、東宮（敦成親王）の成長なされた由を人づてに耳にし、物足りないお気持ちである、と中宮彰子の心中描写で東宮に対し弟宮を「児宮」と称している。この時弟宮の敦良親王は三歳である。

「夜の寝覚」の督の君の生んだ皇子は八、九歳にはなっていないよう。しかもこの時②既に東宮になっており、たとえ寝覚の上の心中であり、偽死事件以前の面影にしても「ちご」という表現はいささか解せない。「儲けの君」²⁵⁾である東宮を「ちご宮」とは表現しないであろう。また現存部巻一に、後の石山の姫君が入内する東宮を「春宮はまだちごにておはします。」とあり、東宮は幼くても「ちご宮」とは称されていない。以上のようにみると、この「ちご宮」は、巻五で督の君の生んだ皇子（東宮）ではなく、末尾欠巻部で登場する新たな皇子の存在を考えて良いのではな

いだろうか。

新たな皇子として考察し具備すべき条件を整理すると、寝覚の上と関係があり、一時的でもその顔を見ることのできる皇子となり、やはり寝覚の上が生んだ娘或いは母親代わりに育てていた娘が、入内し生んだ皇子と言えよう。以上の点に該当する娘は三人である。(一)亡き姉の娘小姫君、(二)老閨白の連れ子の督の君、(三)石山の姫君である。

(一)小姫君は、中巻欠巻部で誕生したので年齢がはっきりしないが、まさこよりは数歳年下と考えられる。そろそろ裳着そして結婚の年齢に達すると思われるが、入内となると相手は誰なのか。物語現存部で、帝の皇子は東宮と督の君の生んだ皇子しかいないことになっている。年齢からすると石山の姫君が入内した東宮がふさわしいが、石山の姫君と異母姉妹であり、また姉大君の没後寝覚の上が引き取り一緒に育てていることからして、寝覚の上が同じ皇子のもとに入内させる可能性は少ないであろう。

(二)督の君は物語現存部末尾で皇子を生んでおり、数年後その皇子は東宮になっている。この皇子が「ちご宮」に当たらないことは先述したが、督の君がもう一人皇子を生んでいたとしたらどうか。前述の「栄花物語」の用例のように東宮には会えないが、その代わり寝覚の上の手に弟宮がいたと考えられないことはないだろう。ただ「栄花物語」の敦良親王は彰子の生んだ皇子故手元で育てることができず、²⁶⁾「夜の寝覚」の寝覚の上は義理の祖母である。確かに「源氏物語」では紫の上が明石の姫君の三の宮（匂宮）と女一宮を六条院で育てているが、紫の上は養女明石の姫君を入内させ、手に子どもがいな寂しさ故である。寝覚の上は小姫君を引き取り、その上まだ手元には今の夫である男君の子ども二人を育てている。もう一人「宮」を引き取り育てる必要はないであろう。残る可能性としては、督の君が第二皇子「宮」を出産する際に、寝覚の上が世話をし、その時の面影を求めていると考えられよう。

(三)石山の姫君とするとどうか。寝覚の上の「風葉和歌集」での最終呼称が「准后」であること、石山の姫自身が「中宮」になっていること等考慮すると、石

山の姫君腹の皇子の存在は可能性としてなくはない。「准后」は天皇や東宮の祖母を暗示し、「中宮」は皇子誕生後与えられることが多いからである。石山の姫君が、里邸(内大臣邸)で皇子を出産し、内裏へ戻るまでの間寝覚の上が世話をしたとは考えられないだろうか。「源氏物語」で、明石の御方が手放した実子明石の姫君の出産を、六条院で熱心に世話をした姿を思い起こせよう。もしそうであれば寝覚の上にとっては、大切な思い出であり至福の時間であったろう。²⁷⁾

以上、「伝慈円筆寝覚物語切」で新たに登場する皇子「ちご宮」に該当する皇子を、条件を満たす人物として考察を加えると、(一) 督の君の生んだ第二皇子と(二) の石山の姫君の生んだ皇子にその資格があると思われる。

この「伝慈円筆寝覚物語切」末行の「御かたみには……」は、上の「ちご宮」から続くのか、それとも別の人物を示しているのか、これだけでは文意ははっきりしない。ただちご宮は「かぎりなくをよずけまざりたまふを、こひしく、おぼつかなくおもいきこえ給」と成長ぶりを懐かしんでいたのに対し、「御かたみ」は「かぎりなく思ひかしづき、こへ」と、手元で大切に養育していたことを示唆している。勿論断定はできないが、「ちご宮」とは異なる「御かたみ」と称される人物を指すのではないだろうか。現存部分の「夜の寝覚」には、「かたみ」の語は十例存する。「かたみの袖」などを除外し、人物に使用されているのは、巻五で亡き老関白の娘(継子)を「昔のかたみ」と呼んでいたり、石山の姫に対して「契りの形見」と称し、恋愛関係や親子関係で使用されている。²⁸⁾ 寝覚の上が「かたみ」と称する程いとおしく思い、この上なく大切に育てていた人物となると、姉大君の没後引き取った小姫君を指すとも良いのではないだろうか。亡き姉の「御かたみ」と呼ばれておかしくはないであろう。そろそろ裳着の年齢に達するはずであり、寝覚の上はその行末を気にしていたはずである。また改作本「夜の寝覚」ではこの小姫君は若君に改変されているが、常に「かたみの若君」と記されていることも傍証とならないだろうか。²⁹⁾

五、第一の予言との関連

以上「ちご宮」に該当する皇子を、その条件から(一)と(二)の皇子ではないかとしたが、現存本及びその他の資料にこれを裏付ける記述は何もない。ただ唯一可能性として示すことが出来るのに、(三)に関しては本物語冒頭で語られる天人の予言がある。

この「夜の寝覚」には物語発端に二つの予言が語られている。第一の予言は、「今宵の御箏の琴の音、雲の上まであはれに響き聞こえつるを、訪ね参て来つるなり。おのが琵琶の音弾き伝ふべき人、天の下には君一人なむものしたまひける。これもさるべき昔の世の契りなり。これ弾きとどめたまひて、国王まで伝へたてまつりたまふばかり」

と寝覚の上の夢の中で、天人がその楽の音色のすばらしさから発した言葉であり、翌年再び天人が下り、

「あはれ、あたら、人のいたくものを思ひ、心を乱したまふべき宿世のおはするかな」

と第二の予言を告げる。従来この第二の予言は、寝覚の上の将来に対する予言として、巻四で寝覚の上自身が「いみじう心の乱るこそは、かの十五夜の夢に、天つ乙女の教へしさまの、かなふなりけれ」との嘆きと対応し、この第二の予言に従い物語は進行すると考えられてきた。³⁰⁾ それに対し第一の予言は「当時の物語の手法から言って、後の巻で実現することの暗示であろうが、現存の巻及び断片的伝わる資料には、はっきりした事が見当らない」とされてきた。³¹⁾ だがこの第一の予言は、以降物語中で全く忘れ去られていたのではない。巻五で初めて寝覚の上の父入道は、孫である石山の姫君と対面する。その美しさ気品漂う姿に、入道は将来皇后位を極めること疑いなくとまで考える。³²⁾ そして「入道殿は、姫君を見つきたてまつりたまひて、御行ひもうち忘れて、明けたてば渡りたまひて御琴教えたてまつり」るほど熱心に琴の手を教える。その結果姫君の弾く琴の音は、

姫君の御前の箏の御琴心みたまふとて、我すこし調べ掻き鳴らして、さした

てまつらせたまへれば、秋風樂を、ただ今の折に合はせて弾きたまへる、すべて十余の人の琴の音とも聞こえず、上衆めきおもしろきこと限りなし。母君の御琴の音は、すぐくあはれになつかしきところぞ、げに天人の耳にも聞き過ぎざるまじくいみじき、これは、いとおもしろく美々しく、そぞろ寒く上衆めかしきこと、今からすぐれたまへるに：

と母寢覚の上の樂の手に並ぶほどに達するようになる。寢覚の上の弾く樂の音は、「げに天人の耳にも聞き過ぎざるまじくいみじき」ものであった。これは物語発端で、天人が降下し予言した、第一の予言を指していることは先学の諸氏誰もが認めるところである。この箇所まで第一の予言は意識されているのである。そして樂の技術などから、「これは、いと殊にめづらしく、母君の御契りの思ひしよりは口惜しく、我も雲居までは思ひ寄りきこえずなりにし」と入道は、この姫君だけでもかねての願いどおり后位にとまで思い、別れに、妹齋宮や娘寢覚の上や大君にも贈与しなかつた「いともの深く籠めおきたまへりける唐の琴」を贈物として引き出すのである。石山の姫君に寢覚の上が、天人の「これ弾きとどめたまひて」という演奏法を伝授したことは、現存資料では示されていないが、その素地は入道の熱心な教育に見出すことができる。

この石山の姫君に入内後皇子が誕生していたとすると、天人の第一の予言は成就されたことになるのではないだろうか。皇子に石山の姫君が樂の手を教授した可能性は、否定できないだろう。樂の手は石山の姫君を通じ、その子「国王」まで伝わることになる。今改めて第一の予言の内容に注目し、「ちご宮」に言及してみても良いのではないだろうか。

結 論

近年新たに見出された「伝慈円筆寢覚物語切」の一葉にある「ちご宮」は、寢覚の上の息子まさこが中納言に就いていることから、末尾欠巻部に入り七年から八年は経た頃と推定される。そうすると現存部巻末で督の君が生んだ皇子は八、九歳となり、既に東宮に就いていると推察され、東宮を「ちご宮」と称するのは不自然と

考えられる。末尾欠巻部で新たに登場する皇子と考えられるのではないだろうか。そして「ちご宮」に該当する皇子の母親を（一）亡き姉の娘小姫君、（二）老関白の連れ子の督の君、（三）石山の姫君の中から種々の条件より考究すると、その皇子は（二）督の君の生んだ第二皇子、（三）石山の姫君が入内後生んだ皇子という両説が可能性として挙げられる。この（二）（三）についての記述は現存の資料からは何も見出せないが、（二）の場合には従来放棄されたと考えられてきた第一の予言の意味を、「ちご宮」と関連し再検討することができるとはならないだろうか。今後一つの試論として考えて行きたい。

注

- (1) 藤原定家筆「更級日記」奥書「ひたちのかみすかはらのたかすゑのむすめ日記也 母倫寧朝臣女傳のとの、は、うへのめひ也 よはのねさめみつのはま、つみつからくゆるあさくらなどはこの日記のひとつのつくられたとぞ」
- (2) 現存伝本について、作者自筆原本ではなく、現存本もまた中村本と同じく改作本であったとする説もある。中川照将氏「夜の寢覚」における改作について「物語の生成と受容」（平成十八年三月 国文学資料館）。
- (3) 阪倉篤義氏「欠巻部分の内容」『夜の寢覚』（昭和三十九年 岩波日本古典文学大系）、鈴木弘道氏「寢覚物語の基礎的研究」（昭和四〇年 塙書房）、同氏「平安末期物語論」（昭和四三年 塙書房）、松尾聡氏「平安時代物語論考」（昭和四十三年 笠間書院）、永井和子氏「寢覚物語の研究」（昭和四三年 笠間書院）、平安文学論究会編『講座平安文学論究』（平成十六年 笠間書院）など。
- (4) 田中登氏「夜半の寢覚」末尾欠巻部断簡の出現（『中古文学』第五〇号 平成四年十一月）、同氏「新出の『夜半の寢覚』末尾欠巻部断簡」（『汲古』第二九号 平成八年七月）、同氏「古筆切の国文学的研究」（平成九年 風間書房）。
- (5) 伊井春樹氏「夜の寢覚」散逸部分の復元——新出資料「夜寢覚拔書」をめぐって——（『國語と國文学』平成十二年八月）、田中登氏「夜寢覚拔書」の解読法（『国文学』〔関西大学国文学会〕平成十三年三月）、同氏「夜半の寢覚」末尾欠巻部の内容——近年出現した資料の位置づけを中心に（『國語と國文学』平成十五年十二月）。
- (6) 仁平道明氏が「夜の寢覚」末尾欠巻部断簡考——架蔵伝後光嚴院筆切を中心に——『狭衣物語の新研究』（平成十五年 新典社）、『夜の寢覚』末尾欠巻部分の展開——講座平安文学論究（平成十六年 笠間書院）で新たな「伝後光嚴院筆切」を紹介なさっている。今回の「ちご宮」検討場面とは直接関連がないので触れなかったが、今後仁平氏御所蔵の断簡については考えていきたい。

- (7) 注(4)参照。
- (8) 田中登・米田・中葉芳子・澤田和人編(平成十四年 風間書房) 資料六の一、二〇一頁。以下「無名草子」「風葉和歌集」「拾遺百番歌合」「寝覚物語絵巻詞書」「夜寝覚抜書」「伝慈円筆寝覚物語切」各の引用はこれに依る。
- (9) 注(4)(5)参照。
- (10) 小松茂美氏(平成四年 講談社)。
- (11) 『寝覚物語欠巻部資料集成』(注(8)参照) 資料五の五、二〇〇頁「あらぬさまにかはりたまひにけるは、いかに。…」。
- (12) 『同』(注(5)参照) 資料三の八・三の一〇、一九二・一九三頁。
- (13) 末尾で寝覚の上がいつ出家したかについては、近年田淵福子氏の『夜の寝覚』末尾欠巻部の再検討』『講座平安文学論究』(平成十六年 笠間書院)がある。
- (14) 鈴木一雄氏校注・訳『夜の寝覚』(平成八年 小学館新編日本古典文学全集)。以下現存本の引用はこれによる。
- (15) 巻四で男君が広沢を訪れた時、寝覚の上が男君を避け齋宮の部屋に隠れ、女房に「さべき法文など習ひきこえさせたまふとて」と言わせる場面がある。また「齋宮の御かたはらを、かしこき陰に立ち離れで過ごしやりたまへば」と、齋宮を頼りとしている。巻五巻頭にも、「齋宮の御有様を、「あはれにうらやましくも行ひすませたまふかな。幸ひなどいふかたこそ、人にすぐれむこと難く、思ふにかなはざらぬ、この世を捨てて、かやうに行ひてあらむことは、いとやすかべいことなりかし。…」と出家した齋宮をうらやむ姿が描かれており、巻四で齋宮を登場させた時から、寝覚の上の出家は構想上準備されていたのではないだろうか。
- (16) 関根慶子・小松登美各氏『増訂 寝覚物語全釈』(昭和四十七年 学燈社)、注(3)を参考にした。
- (17) 注(4)(5)参照。
- (18) 「かへすん」このものがたりのおほきなるなは、しにかへるべきほうのあらむは、さきよのことなればいかげせむ、…」
- (19) 坂本共展氏によると、「源氏物語」葵の巻で源氏は中納言を兼官していたとされている。同氏「右大將源氏の本官」『中古文学』第五四号 平成六年十一月。
- (20) 「公卿補任」『新編増補 国史大系』(昭和五一年 吉川弘文館)。
- (21) 阪倉篤義・高村元雄・志水富夫各氏編『夜の寝覚総索引』(昭和四十九年 明治書院)。
- (22) 七例中特定の人物を指す例が三例、いずれも生まれたばかりの石山の姫君(「ちこ君」「ちこの君」)である。他は、頼りなきげの寝覚の上に対し二例と幼い子の意。
- (23) 『王朝小説論』(平成四年 新典社)
- (24) 引用は、山中裕・秋山慶・池田尚隆各氏校注・訳『栄花物語二』(平成九年 小学館新編日本古典文学全集)による。
- (25) 巻五、五一五頁、「そのころ、内に女宮三所、男、春宮よりはかの儲けの君おはしませず。」(注(15)参照)。
- (26) 寝覚の上は、巻五で男君との間の三番目の子若君を出産したことが語られている。また末尾欠巻部で第四子に当たる女の子を設けたことが絵巻の詞書で判明するが、どの時点で出産したかは明らかではない。
- (27) 「夜の寝覚」と「源氏物語」の関係について特に明石の御方との関係は、坂本信道氏「音楽伝承譚の系譜——『源氏物語』明石一族から『夜の寝覚』へ——」『文学』五六—四 昭和六三年四月)、中村本からであるが中井賢一氏「中村本『夜寝覚物語』における幸福的結末の論理——第二子言の表現と「結構」としての明石御方物語——」(『詞林』三三三号 平成十五年四月)などがある。
- (28) 巻一に母を亡くした太政大臣の子どもたち「形見ども」一例、石山の姫のことを「契りの形見」三例、男君が寝覚の上の残した「形見の衣」それに関するもの三例、巻五で亡き老閨白の娘を「昔の形見」一例、その他帝が寝覚の上を恋しい者として二例ある。
- (29) 「かたみのわか君」三例、金子武雄氏『物語文学の研究』(昭和四十九年 笠間書院) 九一・一九四・二〇五頁。
- (30) 注(15)を始め注釈本、及び野口元大氏「Ⅱ主題と構造『夜の寝覚研究』(平成二年 笠間書院)など多数ある。
- (31) 『増訂 寝覚物語全釈』(注(17)参照)。また同様の意見として、永井和子氏「第一章 寝覚物語」『続寝覚物語の研究』(平成二年 笠間書院)がある。
- (32) 巻五「ただうち見るより際もなき人の生ひ先、その道ならぬ大和相をおほせて、上なき位をきはめたまはむこと、なにの疑ひあべうもあらぬ人のものしたまひける」
- (33) 注(15)の頭注参照。

付記

本稿は、平成十四年度中古文学会秋季大会(於 相愛大学)において、口頭発表したものに加筆したものである。発表当日会場及び懇親会場で、ご質問・ご意見賜った方々に厚く御礼申し上げます。

The two views of “Chigo-Miya” :
a restoration of the missing volume at the end of *Yoru no Nezame*

YONEDA Akemi

Abstract : *Yoru no Nezame*, the tales written in the Heian era, misses volumes both at the middle and end of every existent text, and the reconstruction of the contents of those volumes have been attempted by many scholars. Although this work seemed to have been completed, recently new materials for those missing volumes have been discovered, and so now we need to reconstruct the contents all over again.

Accordingly, I attempted to reconsider the missing volume at the end, based on the newly discovered material, “Den Jien-Hitsu Nezame-Monogatari-Kire”. Especially, concerning “Chigo-Miya”, whose name is mentioned for the first time in this material, two different views are possible : he is either (1) the second prince born of Kan-no-Kimi, or (2) the prince born of Princes Ishiyama after her marriage to the emperor. I would like to take up these views as a tentative interpretation.